祖父と寝小便と村八分

「土曜寸言」040117

一九四五年正月三日の早朝はとても寒かった。僕は、祖父に連れられて集落の新年会に行った。新年会といっても酒肴が出るわけではない。「本土決戦」のために戦闘用の竹槍を作るのが、この会の目的だったのだ。もはや、働き盛りの男たちは戦場に出払っていたので、集まった者は老人と幼児ばかりだった。

思い思いに持ち寄った青竹の先端をナタで鋭利に尖らせ、赤々と燃える焚き火にかざして、ここに焼きを入れる。その鋭利な槍先は、ブツブツと樹液を吐き出しながら、「鬼畜米英」への憎悪をたぎらせて赤黒く変色していく。

祖父は、その日の夕刻リヤカーに乗せられて、当時彼の娘が勤務していた甲府の県病院へ護送された。これが、僕が祖父を見た最後だった。そして、その一ヵ月後の二月初め、何十年ぶりというドカ雪の朝、祖父は死んだ。死因はチフスだった。

こうして、寝小便した朝、母親の怒りを逃れ、スッピンの尻のまま逃げ込む場所、コタツで温まった祖父の懐かしい膝を僕は永遠に失ってしまった。祖父は、義務教育令が頒布されて後、村で只一人尋常学校に入学した人で、寺の僧侶以外では村で唯一字の読める人だった。おねしょの朝には、彼は勝ち戦を伝える新聞を大声で読んでくれた。

法定伝染病だったので、祖父がチフスにかかったことは、すぐに近隣に知られた。祖父は、出征中の息子一家の年末の支援に町場に行って罹患してきたらしいということだった。事実、集団検診の結果、我が家族にも集落の住民にも保菌者はいなかった。

しかし、祖父の入院の日から集落の人々の態度が一変した。何時ものように遊びに出かけると、村内の子供たちは一斉に家に逃げ込むのだ。だから、僕は毎日無人の集落で遊び仲間を探すことになる。共同井戸は使わせてもらえず、谷川の水を生活用水にして、一家は生きていかなくてはならなかった。つまり、あっという間に僕の一家は「村八分」にされてしまったのだ。

そんな四面楚歌のとき、只一人一つ年下のミチ子さんだけが、僕と遊んでくれた。僕は大人になったら、笑くぼのかわいいこの人をお嫁さんにしようと心に決めたが、いよいよその年頃になった時には、すっかり忘れてしまった。

昨秋、熊本では元ハンセン病患者がホテルへの宿泊を拒否されたという。また、甲府ではＨＩＶ患者の子供が幼稚園への通園を断られたという。

おそ、無知ゆえに病気の伝染性を過剰に恐怖し、被差別者を作ってしまう。差別される者の悲しさと悔しさを、僕は寝小便と祖父の思い出と共に今もしっかり憶えている。